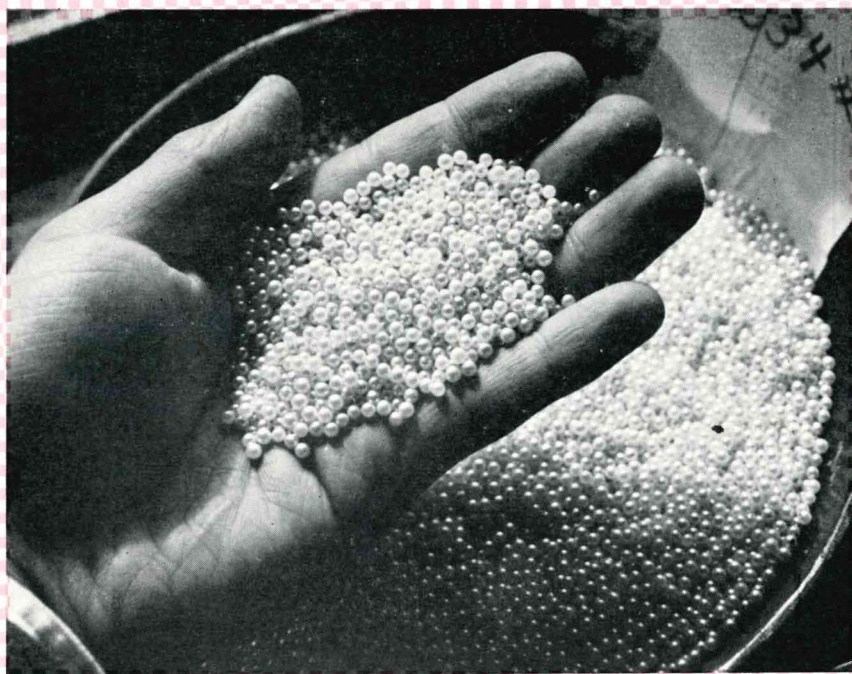


雷 報

才四卷 才十号

通卷28号

(Jan. 1960)



真珠研究会伊勢部会

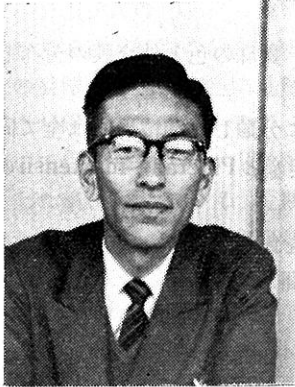
目 次

会員の皆様へ	佐藤忠揚	1
1. 真珠の色は外套膜と水深に関係	大倉邦彦	2
2. 小湊産アコヤガイの 品種に関する研究 II	白井祥平 大倉邦彦 青木吉秋	3
3. 貝掃除に関する研究 I 薬品による 防汚とアコヤガイの成長	宮内徹夫	17
御挨拶	阿部功	20
パロツク 阿部会計幹事を 送るにあたって	白井祥平	21
パロツク 岩永さんを偲ぶ	藤田正	23
資 料		
故岩永謙吉氏紹介		24
研究所めぐり (6) 神戸真珠検査所の巻		25
香川県真珠養殖業の現況	香川県水産課	28
災害に関するアンケート報告	編集局	31
会 報		33
雑 報		34

表紙写真は、全国真珠入札会出品真珠◀細厘も動くようになった◀
(撮影 Canon VT1.8 autoup使用 白井祥平)

会 員 の 皆 様 へ

佐 藤 忠 揚



輝かしい昭和35年の新春を迎えまして
謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

昨年は伊勢湾台風という、大自然の暴
力にいためつけられましたが、其の後の
業界各位の御努力によつて大なる変動も

なく、業界も稍々安定してまいりましたことは御同慶にたえない所でありま
す。

然し乍ら業界の前途は多々難問題も山積致しておりますし、特に我々の研究
会に課せられた問題も多く、且これが解明には時を急ぐものも多いと思います。

今年も皆様と協力して真珠業界の発展に微力を尽したいと思つておりますの
で一層の御援助を御願い申し上げます。

(本会代表幹事)

真珠の色は外套膜と水深に関係^{*}

大 倉 邦 彦^{**}

真珠の色を構成する要因を知る一方法として、真珠の色と外套膜の分布状態の観察を行った。

方法は貝、外套膜、珠ともに黄、白、赤、黒に分類し、挿核場所は全て同条件にして挿核を行い、母貝は度会郡南島町阿曾浦産の *Pinctada martensii* の3年貝を使用した。

4色共、各40個づつ計160個体、合計640個体を飼育した。

試験期間は30年7月26日～11月16日迄の114日間である。

I 統 計 検 出

浜揚後の真珠は同一環境で撰別を行い、第1表は外套膜の色別、水深別に真珠の出現数を調べ、統計分析により出現の傾向を推定した。

分散分析の結果、黄色珠のみが外套膜及び水深別に確率0.001以下の有意性を示し、赤色珠が $0.2 > P > 0.05$ を示した。

更に外套膜の色と同一色の真珠の間に呼応が見られるか否やを、第1表のパーセンテージを理論度数にして X^2 検定を行った結果、黄、白、赤の外套膜が確率0.05以下の有意性を示し、黒のみが有意性を表わさなかつた。

第1表 水深別の各色真珠の出現数

珠の色 水深	黄	白	赤	黒	核	クズ
2.0m	93	59	47	13	17	24
3.0	87	59	40	11	14	12
4.5	74	53	53	7	17	26
6.0	74	57	52	8	10	29
計	328	228	192	39	58	91
百分率%	41.68	28.97	24.40	4.96	—	—

* 東京水産大学水研短報 4 (1)

** 現在、三輪邦彦 (みつわ真珠工業株式会社取締役社長)

又、水深との相関は白を除いて相関係数 r が10.51以下を示し、黄、黒が逆相関、赤が正相関を示した。

II 組織観察

統計分析の結果、外套膜の色と珠の色に関係のある事が判つた。即ち、外套膜の上皮組織の腺細胞に色素細胞が存在する事が考えられる。(但し、この結果は小島吉雄氏の1949年の観察と殆んど同じ)

そして各種腺細胞の分布状態は外套膜の色別に大差なく、ピースをきりとる部分の組織には色素細胞は見られず、組織的には色の分類は出きなかつた。

以上が研究の概略であるが、分散分析、 X^2 検定により黄、白、赤の外套膜を用いて出きた珠は夫々出現率に有意な関係を示し、水深にも関係があることを示したが、たゞ本研究は短期間、同一場所の実験故、今後更に試験区分を細かにして同様実験を行う必要がある。

小湊産アコヤガイの品種に関する研究 I**

白井 祥平、大倉 邦彦、青木 吉秋

(東京水産大学 増殖学科)

Studies on the Kind of Pearl Oyster (*Pinctada martensii*) Founded in the Water of Kominato along Pacific Coast. II

Shohei Shirai***

Kunihiko Ohkura****

Yoshiaki Aoki****

I 序 言 (Introduction)

真珠の養殖に於いて、従来迄挿核に関する研究は種々行われてきたが、近年

* 東京水産大学水研短報 2(2)、1955

** 全国真珠養殖漁協組

*** みつわ真珠株式会社社長

**** 三井生命保険銀座支所長

になつて更に漁場の問題が重要視される様になつた。しかし乍ら母貝そのものについての改良的な研究は殆んど為されていない。

現在養殖業者、筏数の増加により年々母貝の供給不足が増大し、今後必ず天然採苗のみでは優良なる母貝の不足を来し、ひいては真珠の生産に悪影響を及ぼす直接の原因となる。これらに関する研究は絶無ではないが、それらはあく迄実験的であり、且、理論的である。

貝類学者は分類学の立場から *Pinctada* 属を配列し、我国に於ける真珠貝は全て *martensii* であるとしている。これはあく迄分類学の立場からそうされたのであつて、水産の面からみた時には必ずしもどの貝も同じだとは考え難い。筆者中の白井は以前よりこの点に疑問をもち、遺伝学的に、又地域的にみて、又水産上に於いて（少なくとも真珠業者は区別している）幾つかの系統に分けられるものではないかと考え、種々調べてみたが、それに関する報告は極めて少ない。

それ故、各地域のアコヤガイを測定、観察して資料としていたが、今回筆者等は1954年7月29日より3日間、東京水産大学小湊臨海実験場に於いて実験する事になつたので、このテーマをとりあげ基礎的な事に関し観察を行つた。

元来、小湊は太平洋側に於けるアコヤガイの北限とされているので、今回の実験は他の地域のアコヤガイの品種の研究に何らかの参考になると思う。

今回の実験は短時日であつたが、今後の追試によつて更に詳しく調べるつもりである。

実験に当り種々御指導を賜つた猪野峻博士に對し感謝の意を表する次第であります。

II 材料及び方法 (Materials and methods)

試料は7月29日、小湊港付近の岩礁地帯より採集した殻長1~6cm迄の個体数約600個で、3日間に亘る実験期中 *running water* により飼育された。調査方法は下記の通りである。

A) 殻 形

アコヤガイの貝殻の型には種々あるが、蝶番線 (Hinge-line) と腹縁 (Shell-margin) とを直線的にみると、次の5 typeに分けられる。



前頁の様式に従い、全ての貝を大貝 (Large type: 殻長5cm以上)、中貝 (Middle type: 3~5cm)、小貝 (Small type: 3cm未満) に分類して集計した。

B) 殻色及び殻斑

アコヤガイの殻表の色彩や斑紋は複雑であるが、便宜上下記の group に分けた。その際中間型が種々出てくるが強い形質の方に含める事により簡単にした。

放射状 (+)	放射状 (++)	放射状 (+++)	赤	黄	黒
---------	----------	-----------	---	---	---

放射状紋はアコヤガイ独特のものであるが、これに属する貝は大低、薄灰褐色を呈し、その上に7~10本の黄褐色があるが、この中でも条が薄く殆んど腹縁にしかないもの、やゝ明瞭なもの、殻頂まで明瞭にあるもの等がある。これらを分けて (+)、(++)、(+++) を以つてあらわした。尚黄貝、赤貝は全面黄色、赤色を呈しているものを指し、又前記放射状貝の更に特殊化したものと思われる物を黒貝とした。又、放射紋を有するものでやゝ黄色、赤色を呈するもの、又部分的に呈する物等が認められたが、一応放射状の中に含めた。これも (A) と同じく大きさ別に集計した。

C) 殻長と殻高の比較

ノギスによつて殻長と殻高を測定し、大、中、小の別に $H > L$ 、 $H = L$ 、 $H < L$ の百分率を出し、又殻長と殻高の相関 graph を画いた。

D) 足糸分泌について

(1) 採集した個体を29日19時、流水のホーロボットに入れ、30日8時30分迄に分泌された足糸の数を各大きさ別に測定した。

(2) 下記の材料に31日20時30分、殻長5cm位の個体10個づつを置き、1日8時30分迄に分泌された足糸の数を測定した。

材料：ホーロー板、綿布、石、木材、砂、アワビ殻。

(3) 殻長5cm位の個体10個と3cm位のもの10個を2組のバットに入れ、一方は running water に片方は stopped water に入れ、夫々付着に要する時間の相違を調べてみた。

E) 斃死率について

アコヤガイの殻長5cmのもの10個、4cmのもの3cmのもの及び2cm未満のもの夫々10個宛を用意し、空気中にさらして時間的な斃死率をみた。

斃死点の判定は困難であるが、閉殻筋の弛緩と外套膜の収縮時に刺戟する事に對し何ら反応を示さない時を以つて斃死と認めた。

以上の実験に使用したバツトはホーロー引き深さ5cm、4つ切りの大きさのものである。

使用海水は天然海水で水温23.0°Cのものを用いた。

Ⅲ 結果及び考察 (Result and Consideration)

1) 小湊に於けるアコヤガイの分布

日本に於ける太平洋側の分布の北限は北緯35°とされている。事実小湊の貝類相をみてるに中部以南に於いて得られる種が多く、琉球より分布している種類は殆んど、この北緯35°が北限となつているから、小湊付近が多く暖流系の貝の北限地とみてあやまりないと思う。

小湊の地形について述べる事は省略するが、岩礁地帯は実験所入口から地先の「松ケ鼻」一帯と、對岸になる小湊港付近にあるのみで、従つてアコヤガイも棲息するなればこの地域に居る事になる。

「松ケ鼻」には大分以前より潮だまりに若干見られたが、数多くはなかつた。53年度にはこの付近のアコヤガイについて調べたが、本年は殆んど絶滅した様で、僅かに3個体しか発見する事が出来なかつた。

今回偶然、小湊港付近の岩礁地帯にアコヤガイの大群聚を発見し、これを用いて種々実験したが、この際分布についても観察してみたので概略を記してみると、小湊漁港から北西に連なる砂浜を越えた岩礁地帯にもつとも多くみられ、大部分干潮線下にあり、一部は最干潮時露出するが、必ず小さな凹みに棲息している。

他の生物との関係はクログチ (VolSELLA atrata) の大集団が現われ、所々にアオサが生えている所には未だアコヤガイは見られず(クログチは干潮時、完全に空气中にさらされる所に棲息している)クログチがみられなくなつた所から発見出来る。海藻も緑藻類から褐藻類に変わり、又ケガキ (Gryphaea echinata) が付着している。多い所では1m²に50個体も付着しており、貝の上に貝が足糸で付いているものも見られた。

この岩礁を中心に更に西北へ行くに連れて、分布密度が小となり、コンクリート台の付近では殆んど棲息しておらず、僅か所々に1m²に付1~2個体発見されたにすぎない。而も干潮線下であり、この付近の岩礁にはあまり生物もみられず、岩の凹みにたまつた砂泥地にアサリ (Venerupis semideccussata) が棲息しているのみである。

コンクリート台の北側の突堤をこえると、従来よりも更に大きな岩礁地帯が展開し、生物相も豊富である。岩には穿孔性二枚貝、カモメガイ (Phola-

didea penita) や、イシマテ (*Lithophaga curta*) が発見され、クシヤクガイ (*Septifer bilocularis*) が付着している。海藻は同じ褐藻でもカジメ (*Eisenia bicyclis*) の如き大形のものがみられ、アコヤガイは全く発見出きない。それ故アコヤガイの棲息の分布と海藻の種類及びクログチ、ケガキ等と何等かの関係がありそうである。逆に中心部から漁港の方へ行くと、岩礁はなくなり、砂泥地帯が現われる。この地域には全く発見出きなかつたのは当然であるが、所々にある小さな岩礁にもみられなかつた事は、この所に小さな河川がある事によつてゐる。

漁港はコンクリートの埋立であり、岸壁には殆んど生物らしきものはみられないが、アコヤガイが相当付着している。水深は表面より1m以上もあつて、岸壁の真中頃迄みられた。(分布図は省略)

2) 殻形について (Shell form)

この判定に供した貝は534個で、殻長1.1~6.2cm位の個体であり、これを小形、中形、大形の3 groupに分けて比較した。その結果は第1表に示し、第2図にあらわした。

これをみると5cm以上の大形に於いてはA型乃ち長方形がもつとも多く、次にB及びE型が多い。中形に於いてもやはりA型がもつとも多いが、B及びC型も多くなり、E型が減少している。小形貝になるとA型は非常に少く、逆にC型がもつとも多くなり、全体の65%も占め、これに次いでB型が多くなつてゐる。

以上を通じてA型、E型は大形貝の一般形、C型は小形貝(稚貝)の一般形と見る事が出き、サイズによつてA、E及びC型は逆の関係にあるといえる。

小形貝がだんだん大きくなるにつれC型からA及びE型に変る事は中形貝の殻形の分布をみれば容易に判る事である。

稚貝の時期にC型が多い事は乃ち蝶番線は大きいのが、それに比して腹縁があまり発達しない事であり、この事は多分に外套膜の分泌作用に関係がある。初期の外套膜の腺細胞の分泌により出きる貝殻は稜柱質 (Calcite crystal) が多く、大きくなるに従つて真珠質 (Aragonite crystal) が多くなり発生後4年位迄は分泌が盛んであるため、貝殻の成長速く5~6年になると厚さが増す事は小林、渡部氏により報告されている。

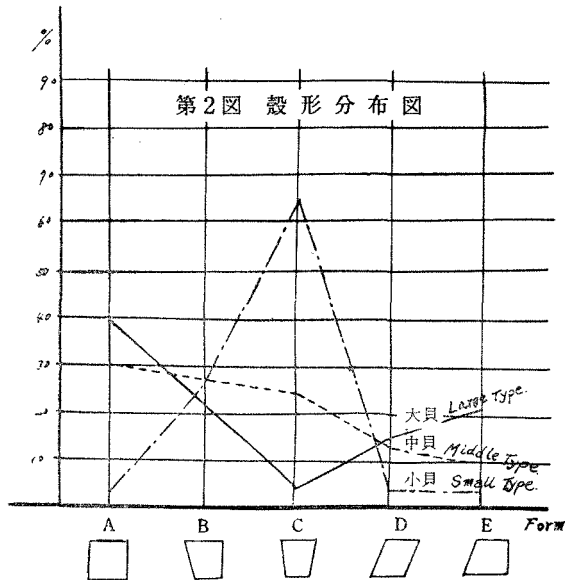
小形の貝に於てShell marginの発達したA、D、E型も少い乍ら同比率に現われているが、これは棲息地が干潮時空中にさらされる所に付着しており、殻頂付近の殻皮層が剝離しているから、相当年令は経過しているものと考えられる。

第1表 大きさ別の殻形分布表

区分	大形貝 (5cm以上)						中形貝 (3~5cm)					
	A	B	C	D	E	計	A	B	C	D	E	計
個体数	41	23	4	15	22	105	92	84	74	35	28	313
百分率	39.04	21.91	3.81	14.28	20.95	100	29.39	26.83	23.64	11.17	8.62	100

区分	小形貝 (3cm以下)						合 計					
	A	B	C	D	E	計	A	B	C	D	E	計
個体数	3	30	75	4	4	116	136	137	153	54	54	534
百分率	2.59	25.86	64.65	3.45	3.45	100	25.47	25.66	28.65	10.11	10.11	100

Fig.2 The various forms of *Pinctada mertensii* found in the water of Kominato along Pacific coast.



3) 殻色及び殻斑 (Shell color and Striped forms)

アコヤガイの殻色の判定は非常に困難であるが始めに述べた様に分類した。

供使個体は532個で測定の結果は第2表に示し第3図に図示した。

それによれば、大形貝では基本形とも言うべき放射紋を有するものもつ

とも多く、黄、赤は他に較べて極めて少なく、黒は全然みられなかつた。

小形貝では放射状貝は他のサイズに比してもつとも少く、それに反し赤、黄、黒を呈するものが多い。

中形貝は放射紋に於いて前二者の丁度中間にあるが、全体にみて放射状貝は80%以上を占め、大形では94.34%、中形は88.43%、小形では80.87%を占めている。

色、斑紋は現在業者が経験的に母貝を分ける時、年令と共に一つの優劣のfactorとしている。現在迄に白井の調べた報告によれば、放射状に顕著なものは巻きに力がある。乃ち分泌が盛んであると言うし、赤貝は優良な真珠を生産するから純粹の赤貝を作り出す必要があるとも言われている。又黄貝は若い内は分泌は盛んであるが、老貝になると急速に衰えるとして業者は好まないが、黄貝の中には生殖腺の所に寄生虫が寄生するから病的になつたものが多いとも発表されている。黒貝は比較的潮流の急な所に棲息している様である。この貝からとれる珠はSilver系統の珠が多いと業者は言つているが、黒貝の殻の内部真珠層は黄色が強く、又放射状の黒条のある内面は同じく黄色を呈している所から、殻皮層の黒色と真珠層の黄色とは何等かの関係があると考えられる。

その点から、むしろ天然に出る珠なればyellow系が多いと考えるが、一方殻内面真珠層の層間距離をみるとSilver系はもつとも大きく、潮流の盛んな所では分泌が大であるという事から考えればSilver系が出るのも否定できない。

松井博士によれば赤貝だからどうであり、黄貝だからこうであるというのはあくまで知つたかぶりでありはつきりとした区別はない。赤貝の中に入れた2ケの珠でも1ケはPinkで1ケはCreamである事があるからだ……と述べておられるが、必ずしもそうとは断定できないと考える。

何となれば例のコシキガイとアコヤガイとの交雑種(hybrid)が沢山出きているし、又天然にてとれるアコヤガイ中にも明らかに赤、黄、黒のhybridとみられるものがあるからである。

それらの中に完全型(遺伝的にはそうではないが)があり、それから順次他の型に移行していくProcessを示すが如きSampleが発見出きるからである。

この様にhybridが形成されるならば、その原型は明らかに少なくとも品種として区別され得るであろう。現在の母貝では1ケの貝から多種多様の珠が出て不思議はないし、且これをみて区別はないと断定するのは早計であろう

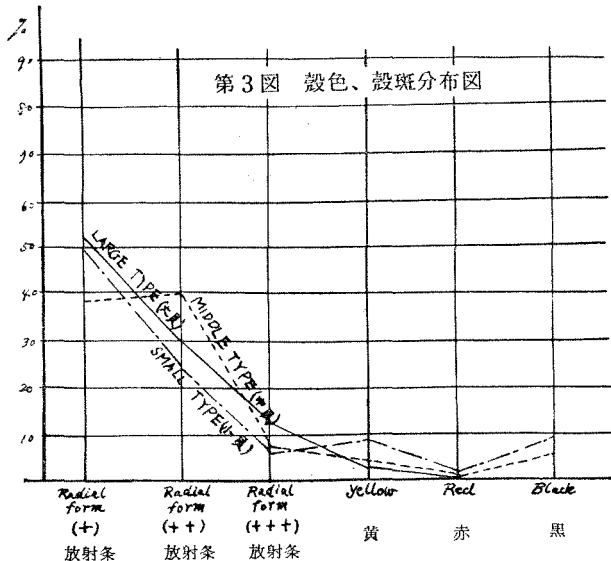
と考える。

第2表 大きき別の殻色、殻斑分布表

区分	大 形 貝							中 形 貝						
	放 (+)	放 (++)	放 (+++)	赤	黄	黒	計	放 (+)	放 (++)	放 (+++)	赤	黄	黒	計
個体数	55	32	13	1	4	0	106	121	129	25	3	16	17	311
百分率	51.39	30.19	12.26	0.94	3.77	0	100	38.91	41.48	8.04	0.96	5.14	5.47	100

区分	小 形 貝							合 計						
	放 (+)	放 (++)	放 (+++)	赤	黄	黒	計	放 (+)	放 (++)	放 (+++)	赤	黄	黒	計
個体数	57	29	7	2	10	10	115	233	190	45	6	30	27	532
百分率	49.57	25.21	6.09	1.74	8.69	8.69	100	43.79	35.71	8.46	1.12	5.64	5.07	100

Fig.3 The Various colors and striped forms of *Pinctada martensii* found in the water of Kominato along Pacific coast.



4) 殻長と殻高の比較 (Relation of the shell length and height)

総数 526 ケのアコヤガイの殻長 (L) と殻高 (H) をノギスで測定し、両者の相関graphを第5図に示し、LとHの大小関係を調べて第3表、第4図にあらわした。この結果によれば、大形貝では $H > L$ が全体の約70%を占め、

殻長よりも殻高の方が長いものが多く、これに反して小形貝では $H < L$ が70%と大形貝と全く反対になっている。

中形貝をみると $H > L$ ……45%、 $H < L$ ……40%とほぼ中間の値を示している。

第4図に見られる通り、小貝から順に大きくなるに従って、殻長よりも殻高の方が大きくなつてきて、その比率は丁度3~5cm貝を中間として左右同形のgraphを表わしている。

第5図のgraphは $y = x$ であるが殻長(x軸)と殻高(y軸)との分布も小さい間は直線の下に、大きくなるに従って上に多くなっている。

優良母貝としての条件にhinge-lineが大きく、大核挿入容易なものがあるが、殻長の大であるものは5cm未満の貝に多い事は明らかになつたが、大貝で殻長の大であるものは少ない。

且、大貝で $H < L$ の関係にあるものは生育が満足に行われたものとは思えない。この様な貝の分泌力は如何であるかは未知であるが、やや劣るのではないかと考える。そうなればhinge-lineの大であると言う事は優良とは言えなくなる。

所が南九州に産する貝は温度高い水域に育つたものであるから、生長がよく、肉が奥の方にあり挿核に於いて困難であり、殻も伸びるばかりで殻は薄い。又、暖海から寒海に移殖するので抵抗力も弱いと言われているが、この点から考えれば殻高の大であるものは悪い事になり、反対に小形貝に普通の $H < L$ 型をした大貝が適する事になる。

この事からしても殻長と殻高の関係は単に殻の測定だけにとどまらず、これを一つの母貝の優劣をみるfactorとなるべくいろいろ調べなければならない。

第3表 殻長と殻高の比較表

区分	大 貝	中 貝	小 貝
$H > L$	71 (67.63)	140 (45.60)	26 (22.81)
$H = L$	12 (11.42)	39 (12.74)	12 (10.52)
$H < L$	22 (20.95)	128 (41.66)	76 (66.67)
計	105 (100)	307 (100)	114 (100)

(カッコ内は百分率)

Fig.4 Table of the comparison of Shell length & Shell height.

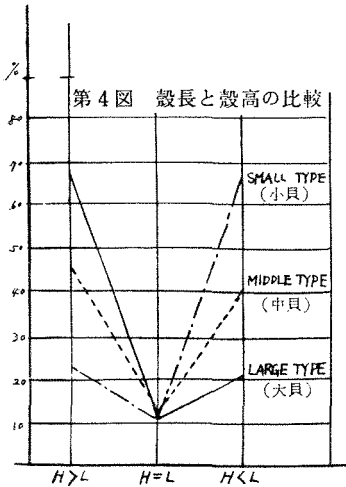
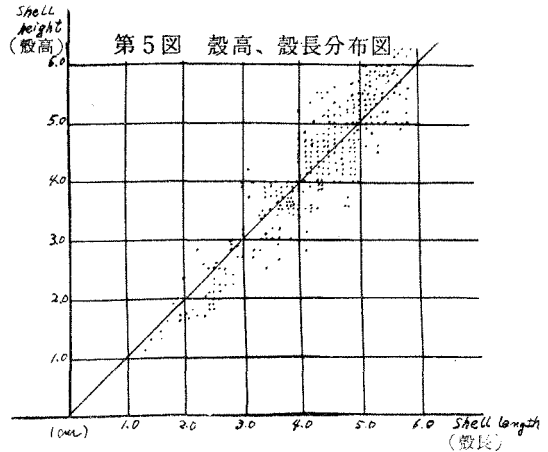


Fig.5 Relation of the length and height between each sizes of *Pinctada m-entersii*



5) 足糸分泌について (Secretion of byssus)

(1) 大きさ別による足糸 (Byssus) 分泌数

実験に供した貝は 487 ケで、実験期間中ホーローバットに飼育して running water を用いた。セットしてから 13 時間 30 分を経過してから調べた結果は第 4 表、第 6 図に示した通りである。

それによれば大貝は全然足糸分泌をしなかつたものは全体の 23% を占め、中貝に次いで大きい。もつとも多く分泌した貝数は 1 本であり、3 本迄減少しているが 4 本になれば急激に減少している。

同じ様に中貝、小貝に於いても分泌数は 3 本迄で、それ以上になると個体数は少い。

全体からみて Byssus の分泌は一夜では 3 本迄が普通で、それ以上の分泌は少い事が判つた。

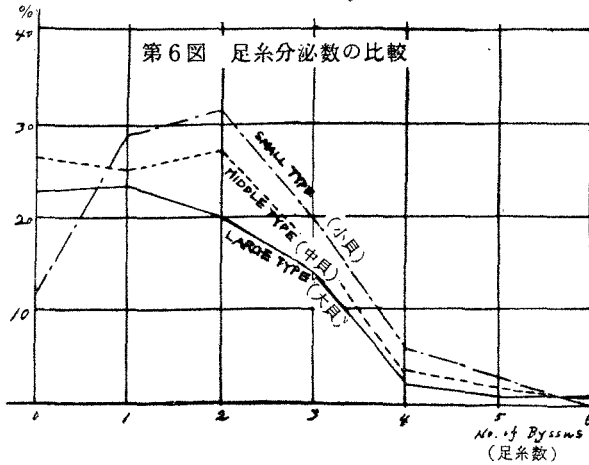
今回の実験では中形貝がもつとも分泌数が多かつたが、やはり大貝には少く稚貝程盛んである。

これは稚貝の時期には、しばしば Byssus をすて、移動する事や、生長が盛んである点からみても否定できない事である。

第4表 大きさ別によるByssus分泌分布表

区分 足糸数	大 貝		中 貝		小 貝		計
	数	%	数	%	数	%	
0	27	22.50%	87	26.21%	4	11.43%	118
1	28	23.30	83	25.00	10	28.57	121
2	24	20.00	89	26.81	11	31.42	124
3	17	14.17	56	16.86	7	20.00	80
4	2	1.67	11	3.31	2	5.71	15
5	1	0.83	5	1.51	1	2.85	7
6	1	0.83	1	0.30	0	0	2
計	100	100	332	100	35	100	487

Fig.6 Comparison of secretion of Byssus in various Pearl oyster.



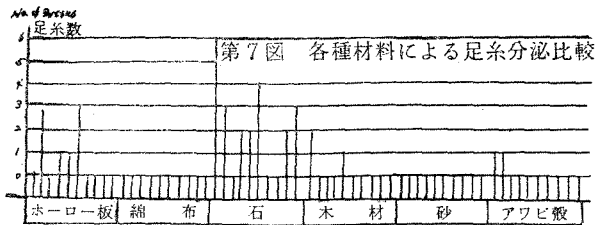
(2) 各種材料によるByssus分泌数

天然に於いては主として岩に付着して、時には材木やコンクリート、竹、針金等にも付着しているのを見うける。又養殖にては殆んど金網籠に入れるので貝同志付着しているが金網籠に付くものは少い。それ故如何なる物質によく付着するかを調べるために、手許にあつた材料を用いて実験してみたが、短時間であり、且小敷で自然環境におかれていないために、とても結果らしきものは得られなかつたが、一応結果を第7図に示した。

これをみると綿布、砂には当然全然付いていない。もつともよくついているのは石で、最高6本も分泌していた。次いでホーロー引きバツトで白色にもかゝわらず4ヶ付着しており意外であつた。

この実験は夜間行われ、12時間後に調べたが、早い個体ではセット後1時間で付着がみられた。

Fig.7 Comparison of secretion of Byssus in Various materials.



(3) 環境によるByssus分泌の相違

真珠の養殖を行つている所は大部分湾奥の波静かな場所で、ここでも多くの天然貝が採集される。場所によれば潮流の非常に停滞する所があり、こういう場所の稚貝の生産状況をみてみると非常に倭小であるものが多い。元来、アコヤガイは小さい間はByssusを時々自分で棄てて、自由に移動するが、成育するに従つて固着し、人為的に抜いた場合には環境がわるければもはや分泌がみられない。養殖籠中でしばしばみられる所である。

水流の循環の如何がどの程度、付着に影響を及ぼすかを知るために、ここに小実験を行つた。

あく迄人為的ではあるが一方の容器は running water 下におき、片方を stopped water にし、夫々大小10ヶづつの貝を入れ昼間と夜間を比較し乍ら観察した。その結果は第5表に示した。

午前8時35分にセットし、午後9時55分迄の13時間20分は昼間であり、この時にはどちらも分泌がみられないといつてよい。

次に明る日の午前7時45分に観察すれば流水の方の小貝は殆んど2本以上の分泌がみられ正常であり、大貝に於いても80%の付着率であつた。

所が夜間にかかわらず、止水の方の貝は何れの個体も分泌しなかつた。

以上からみてもアコヤガイの足糸分泌の日週性は既に報告せられているが、この様な簡単な実験からもはつきりと証明された。

以上 Byssus 問題をとりあげたが、従来迄に Byssus の分泌力と真珠質の分泌とは直接に関連がある事が報告されている。

分泌力は水温変化と一致し、その maximum は水温の最高時期より少し遅れる事や、低水温他の悪環境におかれた時に Byssus の分泌がおさえられ、これが一つの indicator ともなると小林博士は考えられた。

もしも Byssus の分泌の生理について詳細な研究が行われれば必ずや漁場の選択に又母貝の選別に一つの決論が与えられるものと信ずる。

第5表 環境による Byssus 分泌数の比較

環境	貝	貝 No.										
		時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
流	大	31日21:55	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	小	〃	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
水	大	1日7:45	2	2	4	5	1	3	0	0	1	4
	小	〃	3	5	2	2	4	4	3	2	5	2
止	大	31日21:55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小	〃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
水	大	1日7:45	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小	〃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

6) 斃死率について (Death ratio)

アコヤガイの抵抗力の判定の一助にもなるかと考え、この実験を行った。

室温の空气中にさらした場合の斃死率については既に小林博士が冬期に行っている。

我々の行ったものは唯、小湊産アコヤガイについての数値を知るために実験したにすぎない。

実験中の室温は 28°C である。

第6表 空中に於ける各大きさ別の斃死率

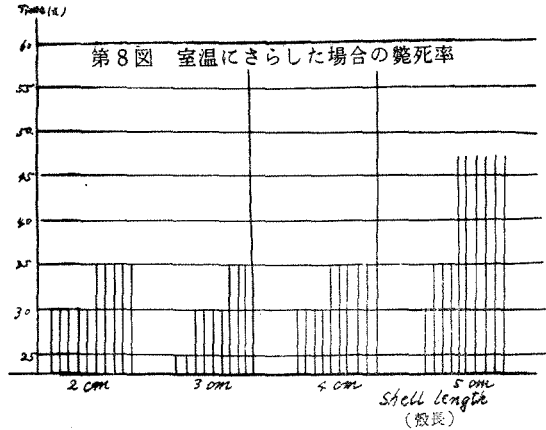
大きさ 貝 No	殻長 5cm	4cm	3cm	2cm
1	30.10 ^{h m}	30.10	25.15	30.10
2	35.25	30.10	25.15	30.10
3	35.25	30.10	30.10	30.10
4	35.25	30.10	30.10	30.10
5	47.25	35.25	30.10	30.10
6	47.25	35.25	30.10	35.25
7	47.25	35.25	35.25	35.25
8	47.25	35.25	35.25	35.25
9	47.25	35.25	35.25	35.25
10	47.25	59.25	59.25	35.25

貝は右殻を下にして4つのgroupに分けて放置した。その結果は第6表、第8図に示した通りである。

小林博士の結果をみると、当年稚貝がもつとも抵抗力が大であるとされているが、この実験では逆に大貝の方が強かった。殻長3cmのものにもつとも早く斃死がみられ、大部分は30時間、次いで35時間で斃死し、5cmのgroupのみ47時間迄生存した。

結局この温度にての斃死に至る時間は大体35時間内とみるべきであつた。

Fig.8 Death-ratio, when Pearl oyster were exposed to the room temperature.



IV 要 約 (Summary)

- 1) アコヤガイの品種を明らかにするための基礎的な測定や小実験を行つた。
- 2) 殻形をみると大貝のそれと小貝とは全く逆関係にあり、中貝は中間にある。乃ち稚貝の間は逆兩脚梯形をし、大きくなるに従つて平行四辺形、逆梯形を呈し、大貝になれば長方形もしくは梯形となる。第一に蝶番線が成長し、次第に腹縁が発達するからである。
- 3) 殻色、殻斑は80%が放射状で、黄貝、黒貝、赤貝の順に少くなる。大貝になる程色貝は少くなる。
- 4) 殻長と殻高では小貝の中は殻長の方が圧倒的に大きく、中貝では兩者平均され、大貝になれば反対に殻高が大きくなり、しかも小貝の比率と逆になる。
- 5) 足糸分泌についてみると大貝は1日平均1本を分泌するが、中、小貝では2本になり、全体を通じ3本以上分泌する個体は急激に少くなつている。又、付着する場所は柔かい動く場所では不可で、石を第一とし、ホーローバットにも付着した。流水と止水とでは、止水中では全く分泌がみられず、流水中でも稚貝の方が盛んであり、且、日週期活動により、夜間に全て付着した。
- 6) 斃死率については4cm未満の貝では半数が30時間以内に、残りは35時間で

斃死した。

この大きさでは大小の相違は少く、35時間をもつて空气中 (28°C) の生存限界とみられた。

- 7) 以上は他の地域のアコヤガイに於いても調べ、それらを比較する事により有意義となつてくるのである。今後は多くの資料にもとづいて結論を出したいと思う。

(参考文献は省略する)

貝掃除に関する研究*

I 薬品による防汚とアコヤガイの成長

宮 内 徹 夫

(三重県立水産高校)

貝掃除は真珠養殖作業のなかでも今後の改良が望まれている代表的な作業で、その改良については、現在までに2、3の方法が試みられ、実用化もされているが、何れも一般化されるまでには至っていない。

貝掃除の改良の一方法として、筆者は薬品による防汚の方法を考え、その実験を昨年より始めた。

第一回目にあたる昨年度の実験は実験中に伊勢湾台風の被害を受け、当初考えていた様な結果を出すには至らなかつたが、一応の結論を得る事が出来たので、ここに報告する。

実験の目的

貝掃除の効果について、業者間では従来アコヤガイの成長の助成と真珠質分泌の促進とが考えられていたが、これについては山口・太田・片田(真珠母貝の成長に関する研究、国立真珠報告1)および山口(真珠の品質に及ぼす貝掃除の効果、会報2巻11号)により、貝の成長、真珠の巻き、色、脱核率および貝の斃死率には貝掃除の大きな影響が現われない事が明らかにされている。

* 1960年1月18日受理

即ち、貝掃除の刺戟そのものがアコヤガイの成長を助けたり、真珠の分泌をよくすると云う従来の考え方は無視してよい事になる。

故に、筆者の考えた薬品による防汚には従来の貝掃除の刺戟はないが、その影響は考えなくともよい。しかしそれとは別に、一応鯉の繊毛運動で薬品の無害な事は調べたものの、薬品のアコヤガイに与える影響、および薬品による処理操作がアコヤガイにおよぼす影響と云うものが問題となつてくる。

そこで第一段階として、先ずそれらの事を明らかにするべく実験を行つた。

実験方法と経過

実験材料としては、昭和33年英虞湾にて採苗した稚貝を用いた。

実験場所は英虞湾・和具浦で薬品処理を行うもの、一定時間空气中に露出するもの、従来通りの貝掃除を行うもの、籠だけを取換えるものおよび無処理のものA・B・C・D・Eのグループに分け、金網籠にそれぞれ20個の貝を收容し、4m層に垂下し養殖した。

実験開始日は34年7月8日で、Aについては薬品処理、Bについては約20分間の空中露出を7月20日、28日、8月7日、19日、31日、9月6日、19日、10月15日(Bのみ)の8回行い、Cについては貝掃除、Dについては金網の取換えを9月7日に行い、Eは無処理のまま残し、11月17日実験を終了した。

7月8日に各グループの殻長、殻巾、重量を、8月7日にはA、Bの殻長と殻巾を、9月7日にはA、B、C、Dの殻長、殻巾を、11月17日にはB、C、D、Eの殻長、殻巾、重量をそれぞれ測定し、薬品及び処理操作の影響は実験開始時の測定値の平均値を1とし、その後の測定値の平均値の増加率を求め、その結果より調べた。

当初の予定としてはA、Bの処理を大体10日ごとに行う予定であつたが、伊勢湾台風のために予定通り行えなかつた。またAは台風時に流失した。

実験結果

グループ別平均成長率

殻 巾					殻 長				
測定日 グループ	7月8日	8月7日	9月7日	11月17日	測定日 グループ	7月8日	8月7日	9月7日	11月17日
A	1	1.18	1.40	—	A	1	1.18	1.47	—
B	1	1.15	1.31	1.54	B	1	1.16	1.46	1.62
C	1	—	1.28	1.57	C	1	—	1.37	1.56
D	1	—	1.28	1.57	D	1	—	1.33	1.50
E	1	—	—	1.54	E	1	—	—	1.58

重 量

測定日 カキ	7月8日	8月7日	9月7日	11月17日
A	1	—	—	—
B	1	—	—	3.73
C	1	—	—	3.72
D	1	—	—	3.52
E	1	—	—	3.54

考 察

先ず薬品のアコヤガイに与える影響であるが、これはAとBの平均成長率を比較した場合(8月7日、9月7日の結果)に殆んど相違がなく、どちらかと云う

とAの方が優れている事から、薬品がアコヤガイに与える悪影響は認められないと考える事が出来る。(薬品で処理する場合に約20分間貝を空中に露出するが、その間Bは空中露出した。)

次に薬品による処理操作のアコヤガイにおよぼす影響であるが、AとC、Dの平均成長率を比較してみるとAの方が優れている事から悪影響はないと考えられる。(9月7日の結果)またAを台風で流失したため、薬品処理したものと貝掃除したものととの成長率を直接比較する事は出来ない(先のAとCの比較はCが7月8日から9月7日の間無処理であるからAと貝掃除したものととの比較にはならない)が、BとCを比較した場合(11月17日の結果)に殆んど相違のない事から薬品処理したものと貝掃除したものの間に成長率の相違は殆んどないと考え事も出来よう。

以上、台風の被害を受け不完全なデーターではあるが、一応実験目的の薬品および薬品による処理操作のアコヤガイにおよぼす影響については、何ら悪影響は認められないと云う結果になった。

お わ り に

今回の実験で薬品による防汚自体には缺点なく、また薬品処理が防汚に効果のある事も同時に認められた。たゞ実験場所が1年に2度も貝掃除を行えば充分と云う様な付着物を調べるには好ましくない条件であつたので、今後はさらに付着物の多い場所で実験を行い、その効果を明らかにし、実用化への方法を考えてみたいと思つている。

(薬品の種類およびその処理方法については、全実験終了後に明らかにする。)

御 挨拶



今回、現在の職を離れると共に御世話になつた研究会からも身を引く事になりました。

研究会在籍中は能力のない私に御指導、御協力下さいまして有難う御座いました。研究会幹事として得た種々の教訓は将来の私によ

い道標となる事でしょう。

その柄でもないのに知らぬ間に研究会幹事となり、何も為し得ずして研究会を去るのは甚だ心残りでもあり、又会員の皆様にも多大の御迷惑をかけた事と思い、こゝに陳謝の意を表する次第です。

「真珠業界は今日の事しか考えない」と云われている現在、少くとも次代を背負う研究会々員の皆様方は、今日の為の研究ばかりでなく10年後の、100年後の真珠業界を目指して日本独特の真珠産業の確立を図るべく、御尽力されるものと期待して止まないものであります。

今後共研究会に御協力下さいまして益々隆盛ならしめる事を祈つて御挨拶に代えます。

昭和35年1月15日

阿 部 功

Baroque

阿部会計幹事を送るにあたって

編集委員 白井祥平

はからずも今回我研究会の運営委員中の重鎮であり、大蔵大臣である阿部君が職を辞される事になり必然的に研究会の方もやめられる事になった。

思えば、我々若手が3年前この真珠会館へ来た頃に研究会が誕生し、佐藤、山本、堀口氏等現在のアウトサイダー運営委員が運営しておられ、当然我々の参加が希望されたが、当時頑強に断り続けてきたのであつた。しかし真珠祭の時に組合との関係が強くなり、組合の中になだれ込みが行われて、とうとう研究会の重荷を背わせられ、それから丸1年というものは完全に1人で計画して研究会を開催し、会報もコツコツと出してきたのであつた。発足当時別団体であつた丈に、組合からは白眼視されづらい思いをさせられたが、ついに研究会も組合の一部という風になつてきてボツボツ協力してもらえる様になつたが、一早く私の片棒をかついでくれた（こう申しては大変失礼であるが……）のは阿部君であつた。それ迄は頑強に協力をこぼんでいた君が、一番働いてくれる様になつたのは何も事務所も自宅も共に隣り同志ということのためではなさそうである。

君は自分で納得しさえすれば必ずトコトン迄ケンカしてでもやる丈の意志と実行力を持つている。会計委員といえども実になり手のない役であり、嫌なものである。これ迄にたまつていた25万円という大金の未収金を殆んど完全にとり立て、研究会の運営を楽にならしめた功は、君の名の因縁かもしれないが、実に大きく、おかげで編集を担当する者としても楽に仕事が進められた。改めてこの欄で厚く御礼申し上げたい。

昨夏以来特に編集の方迄気をくばつてくれ、原稿不足、或いは編集上から私が毎日毎日、セツセと原稿をかいているのをみかねて、ついに無料の原稿書きを引きうけてくれ、御承知の通り殆んど毎号君は発表してくれた。

何かと忙しい別れる本月も、最後の協力を惜しまぬ事が何よりの証 據 である。

会計幹事には妙なジンクスがある。なつて1年たつと大抵やめて行くのであ

る。初代堀口博氏、2代中村好男氏、又然り、そして3代目阿部功氏又々然りである。この例で行けば次の候補者も遠からず……といえそうである。

私の方は不思議と一向変りばえがなく、一生腰のくだける迄コキ使われそう
で、その内に原稿用紙のマス目のために乱視になつてしまう。だからここで一
つ会計幹事さんに任命して頂きたいと思う次第である。

私のタネもシカケもない機械はマメツし、箱は逆さにしても何も出なくなつ
た。

ある悪口家は、お前からその仕事をとりあげたら何もする仕事がないではな
いか……と云うだろうが、私はその時こそ大いにする仕事があり、一文も得
にならぬ無料執筆家兼編集局長より大いに男を挙げるであろう……と信ずるの
である。

形式的な挨拶はやめにして、阿部幹事の今後の活躍を会員と共に期待してや
まない次第である。

(6-I-'60)



Baroque

岩永さんを偲ぶ*

藤田 正

的矢の佐藤忠勇先生に夏の終り頃お会いした時、この間長崎に行つて岩永君の家に泊つて来て善かつたと楽しい思い出を話しておられた。また、真珠研究会8月例会の前には、九州の後送りとの比較には是非岩永さんに講演して戴く話まで出ていた位で、日々、大村湾の入口、東洋一の西海橋のかゝつている付近の真珠漁場で采配を振つておられることと思つていた処、9月19日の懇親会の席上研究会の白井さんから、逝くなられたとのお話をきき、驚き、かつ、悲しみを覚えたのである。

岩永さんは、私が今更こゝで説明するまでもなく、長崎真珠業界の長年に涉つての代表者である上、地元の漁協長まで持たれていた。従つて、私の長崎在任6ケ年余りの間には度び度び会合でお目にかゝる機会に恵まれたのであるが、何時も物静かに挨拶せられていたのが、特に印象に残っている。

又、西海橋の近くに在るお宅にも時々お邪魔し、渡辺理一氏の大村湾に於ける活動状況も説明して戴いたこともあつた。また、幹旋真珠母貝の不足の時には無理にお願いしに、夜更けにお伺いしたこともあつた。この外お宅の付近を車で走る度に用件はなくても必ずお立寄りして、種々業界の様子を承わり、勉強させて貰つたが、その都度、何時も微笑を浮べて老奥さんと共に、気持のよい接待をして戴いた。

この様に、何かと親しく御指導して戴いた岩永さんとお別れして半年、早や、長い寝につかれ、故郷の土に歸られたとは到底思えない位である。

そしてもう、何時の日か、西海橋を訪れて車を廻してお訪ねすることも出来なくなつてしまつた。

今は唯だ、謹んで、津から長崎に向つて冥福を祈り、長崎在職中の御厚情を思い出して感謝する外になつたのは、返す返すも残念でたまらない。

(筆者は前長崎県水産試験場長、現在三重県立大学水産学部講師)

* 1959年10月10日受理

故 岩 永 謙 吉 氏 紹 介

岩永謙吉氏は明治24年4月5日、長崎県大村市玖島郷266番地に生れ、大村中学玖島学館、東北帝国大学農科大学水産学科養殖部を御卒業の後、大村湾真珠株式会社に入社された。

昭和5年5月より西彼杵郡西海村丹納郷に於いて真珠養殖漁業を自営し、17年戦時企業整備迄継続された。

終戦後一早く養殖場を再開され同時に長崎県真珠組合の創立と共に組合長に就任。*

西海村会議員も務められ、昭和22年と27年にはその功により、知事より水産功労者として表彰されている。

多くの要職にあり乍ら、研究指導面についても援助を惜しまれず、今日迄の研究論文にもしばしば、岩永氏に負う所が多い……と賛辞が載せられている。

又、御自身でも養殖用籠の改良研究をされ多くの実績を残された。

昭和34年9月6日、享年69歳で亡くなられた。 (文責 白井)



*25年3月には長崎県真珠養殖漁業協同組合の創立と同時に組合長理事に就任され、三重県に次ぐ大村真珠王国の発展に尽力され、その間、瀬川村漁協理事、長崎県漁業調整委員、全国真珠漁協理事、西

— 神戸真珠検査所の巻 —



真珠検査所は、昭和27年6月30日真珠検査規則の公布によつて東京、神戸に各々設置された。

養殖業界には幾分関心が薄いが、買取られた珠は製品にされ全て兩検査所の窓口を通つて外国に輸出されているし、近年になり輸出不適格品の設定により養殖業界にも不合格品のレベルアップが行われたり、相当つながりがあるので今回は神戸の真珠検査所を訪ねてみる事にした。

現在、生田区にある兵庫県立日本真珠会館内にあり、池田長三郎所長以下5名の所員が検査業務に當つておられる。

そもそも真珠検査制度は、真珠の品質の改良と規格の統一を図つて、我国真珠の声価の保持と取引の円滑に資し、よつて真珠の正常な輸出の促進を期すために制定せられたもので、あく迄取締的なものでなく、産業哺育的な性格を持つた制度である。

現在の検査制度の特徴を資料より引用してみると次の5つにしばられている。

- (1) 民営検査でなく、国营検査である
- (2) 希望検査でなく、強制検査である
- (3) 生産検査でなく、輸出検査である
- (4) 無料検査でなく、有料検査である
- (5) 抜取り検査でなく、全数検査である

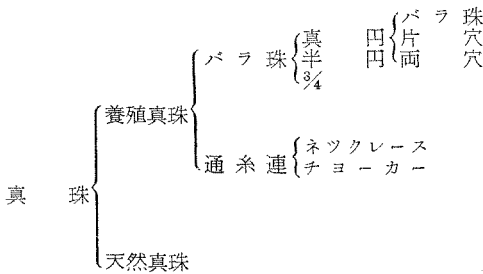
又、検査の効果としては

- (1) 對外信用の確保と声価の昂揚
- (2) 品質の改良と品位の向上

- (3) 取引の安全と事故の予防
- (4) 輸出並びに通関事務の円滑化
- (5) 輸出事情並びに輸出業の実態把握

が挙げられる。

検査の対象となる種類は、貝類から生産された真珠であれば、種類や産地を問わないが、細工品（イヤリング、指輪、ブローチ、ペンダント等）だけは取り扱わない。

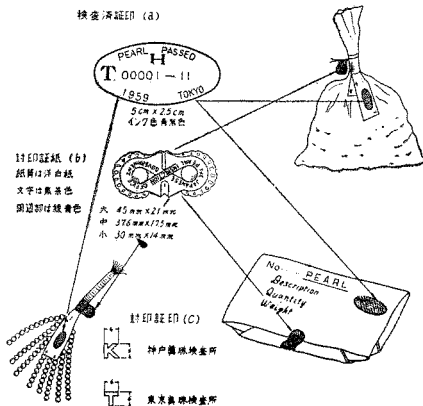


窓口へ持参せられた真珠は農林大臣の定める標準バラ珠及び標準通糸連に基づいて検査されるが、数量、色彩、形状、巻き、キズ、シミ、加工法等について肉眼により総合判定が下される。

又、特殊な場合は物質鑑定器、X線装置等の器械にかけられて調べられる。

終了すれば検査官により夫々等級表示の証印が押され、封印証紙がはられ、封印証印がプレスされた後、更に上梱包に迄同じ事をくりかえして行われ、検定証の交付により完了するわけである。その際に用いられる記号を列記すれば次の通りである。

アコヤ真珠……………記号なし	普通バラ珠 …… L.P
黒蝶 ヌ …… B	片穴 ヌ …… L.P (H.D)
白蝶 ヌ …… W	両穴 ヌ …… L.P (D.T)
マベ ヌ …… M	ケシ珠…………… L.P (S.P)
アワビ ヌ …… A	半円真珠…………… 1/2
淡水 ヌ …… F	スリー・クォーター 3/4
	通糸連…………… St.
重 量…………… 匁	腕 輪…………… St. (Br.)
大 き さ…………… mm	組 み 珠…………… L.P. (P.)
連 の 長 さ…………… インチ	変 形 珠…………… L.P. (Bar.)



33年12月より、下級品規格の引上げが実施せられ、輸出不適格品をプールして廃棄せられてきたが、ローグレードとしてマークされる品物は次の項目に概当する場合に取り扱われている。

- 1) ドロ珠：明白に判るもの
- 2) 薄巻：真珠層が薄く、核そのまゝの状態に近いもの
- 3) 変形：著しい歪み、又は

- 4) キズ：イボ又はピンホールが多く、細工に不適当なもの
- 5) 割れ珠：核割れ、真珠層割れ等亀裂の明白なもの

封印証紙 (e)

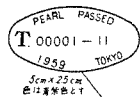


封印印影 (f)

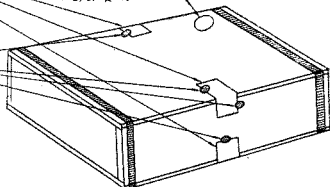


封印の紙及び封印印影は東京・神戸の両検査所共通。同大・同色とす。印影の検査所名は東京にTOKYO 神戸にKOBEとす。

検査済証印 (d)



4 封印要領



- 6) 染め珠：染色過度のもの
 - 7) 荒珠：漂白過度のため、真珠層が荒れ、又はもろくなっているもの
 - 8) シミ珠：シミの程度が著しいもの
 - 9) 破損品：ハーフ・パールの台はがれ、通糸連の糸切れ等、検査時の破損品受検品が各等級混合品である場合は、最低品質のものをもつて格付する。
- バラ珠では正確を期するため、6ミリ以下、6~8ミリ、8ミリ以上の3段階に篩い分け、通糸連にあつては5匁以下、5~8匁、8匁以上の重量区分をして提出する事になつている。

今後の計画としては、いろいろ下記のような器械があるが、使う段階に至っていないので、これらの研究を進め、研究室を増設して、化学的な検査を進めて

行きたいと所長は述べられている。

最後に検査所にある器械類と検査実績を付して紹介を終わりたいと思う。

(5-I-1'60、文責白井)

真珠の検査に関する器械類

螢光度測定装置
 アクメ物質鑑識器
 褪色試験器
 超軟X線装置
 万能撮影器
 双眼顕微鏡
 鉍物顕微鏡
 微少硬度計
 照度計
 色温度計

検査所開設以来の検査実績

区分 年度	東京真珠検査所		神戸真珠検査所		合 計	
	枚	枚	枚	枚	枚	枚
昭和27年	927	742	566	700	1,494	412
28	1,081	189	1,163	101	2,244	290
29	1,900	779	1,894	831	3,795	610
30	2,458	810	2,470	791	4,929	604
31	2,951	645	3,837	232	6,788	897
32	3,562	053	3,587	376	7,149	429
33	4,781	854	5,147	140	9,928	994
34	4,998	745	6,354	300	11,353	045

香川県真珠養殖業の現況

——脚光あびる化粧巻漁場——

香 川 県 水 産 課

香川県の真珠養殖は、瀬戸内海に面する各県同様に化粧巻漁場として近年とみに脚光を浴び急速な進展がみられ、その浜揚量は1.1トン(約300枚)を超え、また母貝養殖も昨年始めたばかりではあるが、これまたその生産は、年々何倍増と、日の出の勢いである。

真珠養殖の歴史

昭和27年ハマチ養殖で有名な安戸池においてくろ貝養殖を行ない、時を同じくして和歌山県田辺市の日本真珠養殖KKが小豆島で化粧巻を試み、その試験

結果に期待がかけられていた。翌28年も引き続き双方合計14万貝の試験を行ない、この結果に基づいて会社から漁業権設定の希望があつて、はじめて漁業関係者の注目を集めることとなつた。

当時は漁業にみるべきもののない寒村の未利用内湾に、特殊な技術、立地条件及び資本金が一体となつてはじめて可能だという真珠養殖の進出は、工場誘致と同じ考え方で評価されたが、漁業権問題となると、その保有主体について、漁民感情と漁業法のギャップを埋めるのに一苦勞した。

こうして、年々僅かづつ筏数も増して、20万貝に達した昭和31年の暮頃になつて、三重県などから一挙に大量の進出希望があり、翌昭和32年度には約200万貝300メの浜揚げが行なわれた。

香川県における問題点

さきに述べたように、当初歓迎された真珠業者が、本場の三重漁場の荒廃と三重県の行政指導が原因で、わずか1年間に10倍もの筏が浮ぶ様に、漁場として余力はあつても、漁民感情と對立して自づと漁場は制約を受け、一面には、本県水産行政の重点施策たる、浅海増殖5ヶ年計画が軌道に乗りかけた矢先で、特にカキ養殖漁場の一部を割愛することは忍び難い情勢から、依然問題となつた。

カキのむき身の生産量の推移は昭和30年度11トン（約3千貫）であつたものが7倍、4倍、2.8倍と年々躍進を続け昭和33年度には83トン（約22万メ）と増加し、地元産業育成を先行させたい希望と漁業権保有主体の問題で、漁場計画は委員会に諮問以来、2年近くもみつづけて、漸く公聴会の開催までにこぎつけ、既設漁業権2件を除いて、12の漁場で免許によらない変則的な操業を余儀なくされている。

漁場の利用状況

県内施術は、立地条件等からまだ傾向的に論じられないが、毎年6月中旬を中心に、施術貝を持込んで化粧巻するのが常識的であるが、密殖漁場で夏置きでない業者は別として、本県のような内海へは色目はすぐれないが、巻きの早い南の外洋性漁場からの移殖は、9月頃に移殖するのも一方法だと考えられる。

本県に漁場をもつた業者は、一様に貝の羽先が伸長するので、当初非常な期待をかけるが、試験むきして巻の薄さにまず驚かされる。それでも、密殖漁場よりは栄養状態もよいので巻はよい方であるが、外洋性漁場と比較すれば数段と巻が遅い。この羽先が伸びるのは、鹹度の差によるようで、比重1.025を越

えることはない。従つて採算上8月まで珠の増重を主眼に、基地漁場に置いた施術貝を慎重な輸送手段で9月に搬入するならば、10月から急速に進む巻によつて色目も見違えるようになり合理的な化粧巻ができる。

浜揚げの状況

浜揚げは12月下旬水温13度となつて開始され1月中旬水温9度頃に終る。本県の海は、春水温の上昇が遅れるが、夏は30度近く上昇し、水温の下降は遅いが越冬は不可能で、この浜揚げ時期中ならば終始色目も重量も変らぬという業者と、浜揚げは遅い程よいとする二つの説があるが、これは漁場差に基くものと思われる。何れにせよ上質真珠が得られることは論をまたないところである。

母貝養殖の台頭

さきにカキ養殖の経過に触れたが、カキは昨年頃から、漁場によつて大量斃死が頻発し、業者間に相当の動揺がみられ、たまたま昨年某業者の勧めもあつて稚貝を購入、6月中旬から11月中旬まで5カ月間養殖したところ、15倍にも成長した。この稚貝はその成長ぶりと、折からの母貝ブームに乗り、笑いのとまらぬ程儲け、カキ業者の一部には母貝養殖に切り替えたい希望者も現われる始末で、昨年は25トン出荷したが、本年は130トン、来年には338トン（約9万本）の生産を目論む有様である。

このようなブームに近い増産ぶりは一つは衆気性によるものであろうが、養殖期間も短かく市場は県外に限られるところから、本県に進出してきた真珠業者とタイアップする現在の一方法ではあるが、貝の羽先の伸びのよい漁場の特性を生かして養殖を行ない、必らず高値で売れる特大母貝を作るべきだと高山真研所長の御意見どおり、関係者間で寄り寄り協議している。

以上、とかくの問題が次から次へと発生しながらも、本県の真珠養殖も年ごとにその根を張つて、県内業者も2~3着業するなど、着々と成長を続けている。

（「真珠」第4巻、第11号より）



アンケート報告

伊勢湾台風による被害状況から今後の対策の一資料として、下記のアンケートを出しましたが、予想通り回収がわるく、とても統計できませんが、折角出していた人のために発表しました。

(編集局)

1. 竹筏と木筏の場合どちらが被害が少なかったか。

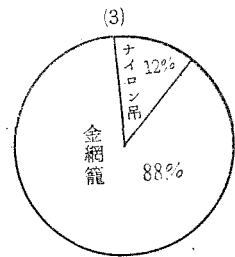
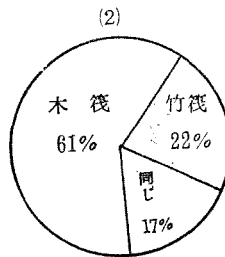
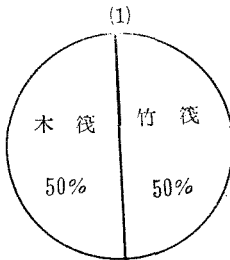
竹筏 木筏

2. 竹筏と木筏で破損又は分解した場合の回収率はどちらがよいか。

竹筏 木筏 同じ

3. ナイロン吊りと金網籠の場合どちらが被害が少いか。

ナイロン吊 金網籠



4. ナイロン吊りと金網籠の場合どちらが貝の回収率がよかつたか。

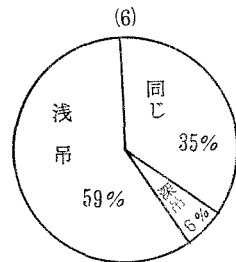
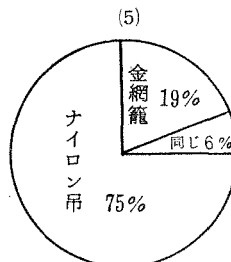
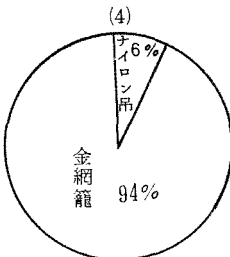
ナイロン吊 金網籠

5. 回収した場合の斃死率はどちらが多いか。

ナイロン吊 金網籠 同じ

6. 浅吊りと深吊りの場合どちらが被害が少いか。

浅吊 深吊 大差なし



7. 復旧作業開始後何日位で貝の回収が終つたか？

解答中一番短かいのは紀州の7日で15日（浜島、布施田）20日（南海、迫子、的矢、片田）30日（鳥羽、英虞、五ヶ所湾）40日（和具）。

最も長いのは五ヶ所の50日である。全体としては30日で回収し終つた所が一番多い。

養殖貝数と回収量は如何？

養殖貝数は規模別の作業能率を見るために調べたが、回答が少ないので全体からみれば最もとれなかつた0%から10、15、25、30……85、90、99%と殆んどまちまちであつた。

8. 海底に落ちた貝の生存率は如何？

これも数少ないのでまとまりがなく、海底状況（岩場か泥地）或いは水深によつて違うが、5～10mでは1ヶ月後で40%が多く、被害の大きい五ヶ所湾口、間崎では1週間後にすでに80%の死滅があつた。

又紀州は5日後に全滅しており、回収日数が早かつた事は生きている貝が殆んどなかつた事によつている。

20～30mの深い所では半月以上たつても30～50%生きており、深い所がよければ安全に保たれたとも言えよう。

9. 当年貝と2、3年貝との斃死率の差？

一寸何を規準にしてよいかわからなかつたのか解答者が少ないが、当年貝→2年貝→3年貝の順に死が多い。乃ち若いもの程強いというものが大部分で、逆に3年貝→2年貝→当年貝というも若干みられ、又差がないというもあつた。

10. 今回の被害から考えて今後どの様な対策をとるか？

A. 筏について

伊勢湾台風の様には大きくては処置なしという回答が多く、従来通りという答と補強する、或いはヒナンする、ピン玉にする等改良策もあつた。

B. 筏の設置について

これにもとても持たない……という意見もあつたが、新しい木材を用い、イカリを増加し、ワイヤーを長くし、而も長く筏を連結しない等研究的な人も多く、又各資材にも各自の核印を入れる事、各漁場を区分して協同設置をするという新しい意見もみられた。

C. 籠、ナイロン吊について

80%籠に重点をおく……とよせられており、災害後の回収、斃死率が反映している。又トランクがよいから換えるとか籠のとじ方を密にする、所

有者の印を入れる、深吊りにするという意見や、ナイロン吊りでは紐を短かくして貝を密着させて吊るすとか、2本以上まとめて垂下するという改良意見、更に地括げがよい……等の答があつた。

D. その他

時間的には陸上に一時難を逃れる方法、各業者に記号を付し組合へ登録させる。風上の筏を丈夫にすれば大丈夫。ピン玉養殖がよい。

会 報

1. 品評会開催に関する件

昨年度に提案があり検討中であつた優良真珠の品評会を本年2月に初めての試みとして実施する事になり、下記の如き要綱が決定されましたので、会員の皆様は勿論、業者の方々も奮つて出品されん事を希望しております。

- (1) 日 時：2月17日、研究会当日（全国真珠入礼会の翌日）
午前9時より正午迄受付
- (2) 場 所：伊勢市真珠会館3階大会場
- (3) 受付規準：各サイズ別（全国真珠規準による）に花珠（特選品）とする。
数量は制限せず（但し評価出きる事を要す）選別は厳選して均一品とする。
- (4) 方 法：受付は当日、参加申込書（地区、名前、漁場、作業年数）に記入して行ふ。
受付No.と数量により預り証を発行する。
サイズ別に順位をつける。
発表、表彰の後預り証により返品する。
現品は当日中にお持ち帰り頂く。
- (5) 表 彰：全国真珠養殖漁業協同組合長賞 1名
日本真珠振興会長賞 1名
真珠研究会伊勢部会長賞 2名
その他、各サイズ毎に優秀品若干名、参加者には記念品を御渡しします。
- (6) 審 査 員：全国真珠養殖漁業協同組合常務理事

全国真珠養殖漁業協同組合評価委員
研究会 伊勢部 会 役 員

雜 報

1. 交換資料御礼

真珠新聞社：真珠新聞

水産經濟新聞社：日刊水産經濟新聞

輸出組合：輸出実績（10月）

レポート No.20

日本真珠振興会：「真珠」

国立真珠研究所 大村支所：「しんじゆ」 第44号

三重県立大学：水産学部紀要

Rep. of the Fac. Fisheries, Pref. Univ. of Mie

北海道水産試験場：別刷2部

（木下虎一郎）

三重県立大学：別刷2部

（堀口吉重）

資源科学研究所：資源科学研究所彙報 No.50

〃 別冊

2. 研究会「会報」交換先

水産庁長官

〃 調査研究部長

〃 漁政部長

〃 振興課長

〃 調査資料課長

〃 浅海増殖班長

〃 真珠係長

水産資料館

日本真珠振興会

東京真珠検査所

神戸真珠検査所

国立真珠研究所

〃 大村支所

水産研究会

農林中央金庫名古屋支所

勸業銀行伊勢支店

北海道大学水産学部

山形大学文理学部

東北大学水産学部

〃 女川水産実験所

〃 浅虫臨海実験所

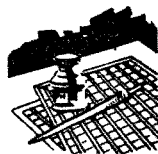
東京水産大学増殖学科

京都大学理学部
 〃 瀬戸臨海実験所
 日本真珠研究所
 三重県立大学水産学部
 農林省水産講習所
 長崎大学水産学部
 鹿児島大学水産学部
 〃 文理学部
 九州大学水産学科
 資源科学研究所
 水産庁東海区水産研究所
 〃 内海区水産研究所
 〃 日本海区水産研究所
 〃 〃 香住支所
 〃 西海区水産研究所
 〃 〃 浜試験地
 〃 北海道区水産研究所
 三重県水産試験場
 〃 〃 尾鷲分場
 〃 〃 伊勢湾分場
 三重県庁水産課
 三重県立水産高校
 兵庫県庁水産課
 滋賀県庁 〃
 〃 水産試験場
 千葉県 〃
 神奈川県 〃

福井県水産試験場
 和歌山県 〃
 静岡県 〃
 〃 〃 浜名湖分場
 京都府水産試験場
 愛知県 〃
 愛媛県 〃
 高知県 〃
 徳島県 〃
 広島県 〃
 山口県 〃
 長崎県 〃
 熊本県 〃
 鹿児島県 〃
 平戸市役所水産課
 真珠研究会会長（御木本美隆）
 〃 東京部会
 〃 神戸部会
 〃 九州部会
 兵庫県真珠養殖協会
 三重県真珠協同組合連合会
 全国真珠養殖漁業協同組合
 三重県真珠貝養殖漁業協同組合
 水産経済新聞社
 真珠新聞社
 日本水産資源協会
 水産時報社
 伊勢記者クラブ



編 集 後 記



- もうあと34年度も僅かになり、年度の締めくくりの仕事を控えた今日、突然研究会の大藏大臣であり、例会担当重役の阿部功氏が辞められた事は大きな痛手であり、今後の運営に少なからず支障を来すであろうが、氏の将来ある再出発を会員一同と共に心から祈りたい気持である。
- 第4巻も愈々あと2回を残すのみになつたので、原稿のある方は早い目に提出頂き、活字にして資料とする事が望ましいと思います。
- 2月17日に業界初めての試みとして「真珠品評会」を開催致しますから、会員はもとより業者各位にもせいぜい推めて頂き、多数の出品を斯待しております。
- 真珠会館最多忙の折、期待通りの会報を作る事ができない事を御詫び申し上げます。

(S)

賀 正



新らしい春を迎え、より
一層の御繁栄と御清福を
御祈り申し上げます

昭和三十五年元旦

真珠研究会伊勢部会



代表幹事	佐藤	忠揚
運営委員長	安田	勝己
会計委員	阿部	功平
編集委員	白井	祥平

昭和35年1月31日発行

第4巻 第10号会報 (非売品)
(通巻第28号)

編集委員 白井祥平

三重県伊勢市岩淵町84番地ノ2

真珠会館内

発行所 真珠研究会伊勢部会

電話(伊勢局代表)4147番

三重県伊勢市岩淵町140

印刷所 神都印刷株式会社

電話(伊勢局)2230番